

貿易収支は緩やかな改善傾向、徐々に黒字定着へ（3月貿易統計）

3月の貿易収支は2012年6月以来の黒字に。原油安を主因とした輸入の落ち込みのほか、①円安に伴う円建て価格の嵩上げおよび価格競争力の改善、②海外景気の持ち直し、③海外生産シフトの影響一巡を主因とした輸出の底離れが、収支改善に作用。先行きも、こうした収支改善要因が、国内景気の持ち直しに伴う輸入数量底入れの影響を凌駕し、徐々に貿易黒字の状態が定着していくと予想。ただし、数量面の動きのみが反映される1～3月期の実質成長率（前期比）に対する外需の寄与度は、昨年10～12月期の+0.2%Ptから低下し、マイナスに転じた可能性も。

3月の貿易収支は2年9ヵ月ぶりの黒字に

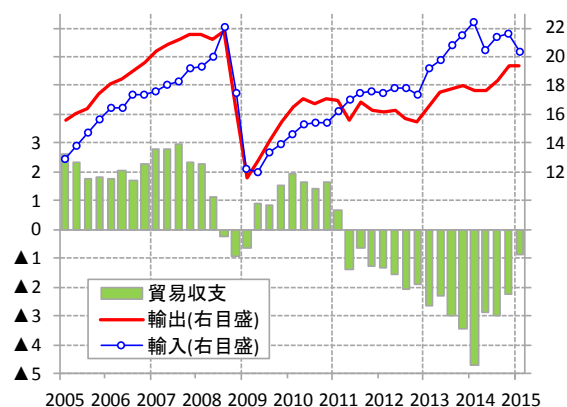
本日発表された3月の貿易収支（速報値）は2,293億円と、2012年6月以来の黒字となった。輸出（6兆9,274億円）が前年同月比+8.5%と2月の+2.5%を上回る伸びとなったほか、輸入（6兆6,981億円）が▲14.5%と2009年11月以来の大幅減となったことから、収支が前年同月から1兆6,794億円も改善した。前年同月比で見た輸出の増加は7ヵ月連続、輸入の減少は3ヵ月連続、貿易収支の改善は6ヵ月連続である。

季節調整値で見ても、3月の貿易収支は33億円と、小幅ながら2011年2月以来、すなわち東日本大震災以降で初めての黒字に転じた。輸出（前月比+3.7%）が2ヵ月ぶりの増加となったほか、輸入（▲5.0%）が4ヵ月連続で減少した。

これにより、1～3月期の季節調整値ベースの貿易収支は、輸出が前期比+0.5%と3四半期連続で増加した一方、輸入が▲5.9%と3四半期ぶりに減少したことから、赤字額が8,829億円と昨年10～12月期の2兆2,640億円から1兆3,811億円縮小した。四半期での赤字額が1兆円未満となったのは、2011年7～9月期以来、3年半ぶりである。

以上を要すれば、貿易収支は、輸出の底離れと輸入の落ち込みにより改善傾向が続き、ついに黒字となる月も出始めたということになる。

輸出入と貿易収支の推移（四半期、季節調整値、兆円）



（出所）財務省

なお、2014年度通期の貿易収支は▲9兆1,343億円と4年連続の赤字となったが、輸出（74兆6,709億円）が前年度比+5.4%と2年連続で増加したこと、輸入（83兆8,051億円）が下期を中心に▲1.0%と5年ぶりに減少したことから、収支は2013年度の▲13兆7,564億円から4兆6,221億円改善した。

1～3月期の輸出：数量の持ち直しが続くも、増勢加速には至らず

1～3月期の輸出は前年同期比で+9.1%と、昨年10～12月期と同率の伸びとなった。これを価格要因と数量要因に分けて見ると、価格の伸びが10～12月期の+6.6%から1～3月期には+5.0%へと鈍化したが、

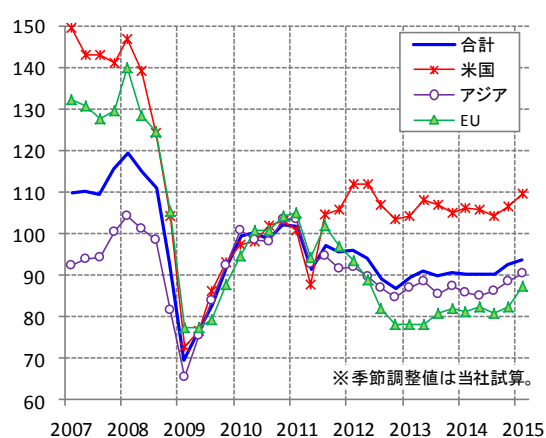
数量の伸びが+2.4%から+3.8%へと強まった。前年同期比で見た輸出数量の増加は3四半期連続である。

輸出数量について仕向地別に見ると、中国向け（2014年シェア18%）が前年同期比▲4.9%と、10～12月期の▲6.0%に続いて2四半期連続のマイナスとなった。1～2月の旧正月要因に伴う振れを均した後の実勢で見れば引き続き減少方向と判断され、それには中国の景気減速に伴う在庫調整が一因になっていると推察される。

しかし、中国向け以外は総じて増勢が強まっている。具体的には、米国向け（シェア19%、10～12月期+1.4%→1～3月期+3.6%）、EU向け（シェア10%、+1.0%→+7.9%）の伸びが高まった。また、アジア向け（シェア54%、+1.2%→+4.6%）も、上述した中国向けを含んでいるにもかかわらず、10～12月期を上回る伸びとなっており、NIEs向け（シェア22%）やASEAN向け（シェア15%）の増勢が大幅に強まった模様¹である。米国向けの増加は自動車²が中心であり、景気の堅調や円安に加え、自動車メーカーの海外生産シフトに伴う影響の一巡がポジティブに作用していると思われる。また、EU向けの増加も自動車を中心であり、原油安を追い風とした個人消費の持ち直しが背景と考えられる。NIEs向けの大幅増については、船舶が一時的に押し上げた側面があるが、半導体等電子部品の好調も続いており、現地IT企業による新製品投入・増産の動きが追い風になっていると推察される。そして、ASEAN向けの増勢加速は、原動機や金属加工機械といった一般機械のほか、自動車、自動車部品が牽引役となっており、現地景気の持ち直しが大きな背景になっていると考えられる。

ただし、季節調整値で見た対世界の輸出数量は、10～12月期の前期比+2.3%から1～3月期には+1.4%へと伸びが若干鈍化したと試算される。仕向地別に見ると、対米国（10～12月期前期比+2.2%→1～3月期+2.9%）、対EU（+1.9%→+6.0%）、対アジア（+2.4%→+2.1%）、うち対中国（▲0.4%→▲2.0%）のいずれも、上述した前年同期比の動きと概ね同様の示唆を伴う動きとなっている。しかし、米国・EU・アジア向けの伸びがいずれも全体平均を上回ったことから、中南米向け（シェア5%）や中東向け（シェア4%）³などの増勢が弱まったと推察される。原油安に伴う産油国経済の悪化が抑制要因となっている可能性がある。

仕向地別輸出数量の推移（季節調整値、2010年=100）



（出所）財務省、伊藤忠経済研究所

以上を小括すれば、輸出数量は、①円安進行に伴う日本製品の価格競争力改善、②自動車などの海外生産シフトの影響一巡、③米欧諸国や東南アジアの景気拡大を背景に、持ち直しが続いているものの、中国向けの弱さなどから増勢加速までには至っていないと言える。

¹ 今回の速報では、3月分の対NIEsや対ASEANの輸出数量は未公表。しかし、1～2月で見ると、NIEsが前年同期比+10.8%、対ASEANが+11.2%と、いずれも10～12月期（対NIEs+5.8%、対ASEAN+3.9%）から増勢を強め、2桁増に達している。なお、NIEs、ASEANはともにシンガポール（2014年シェア3%）を含んでいる。

² 1～3月期の米国向け自動車輸出台数は前年同期比+3.5%と、5四半期ぶりにプラスに転じた。

³ 対中南米や対中東の輸出について金額の前年同期比で確認すると、対中南米は10～12月期の+10.2%から1～3月期には+3.0%へ、対中東は+24.7%から+11.2%へと減速した。

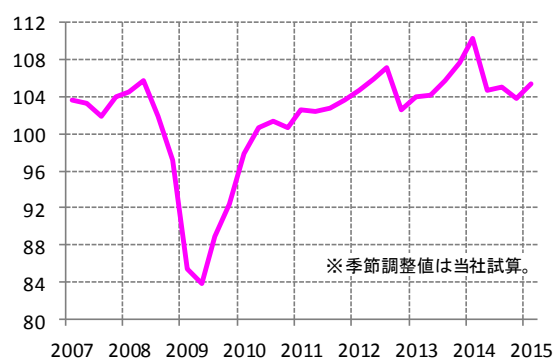
1～3 月期の輸入：原油安により落ち込むも、数量面では下げ止まりの兆し

1～3 月期の輸入は前年同期比▲9.4%と、昨年 10～12 月期の+1.2%からマイナスに転じた。四半期でマイナスとなったのは、2009 年 10～12 月期以来である。品目別金額の前年同期比を見ると、原油や石油製品、LNG をはじめとした鉱物性燃料（2014 年シェア 32%、10～12 月期前年同期比▲9.7%→1～3 月期▲32.1%）の減少率が大幅に拡大し、全体を強く下押しした。

また、輸入全体について価格要因と数量要因に分けて見ると、価格（+4.9%→▲5.1%）が 2 年半ぶりにマイナスに転じたほか、数量（▲3.5%→▲4.6%）のマイナス幅が拡大した。価格のマイナス転化は原油安によるものであり、入着原油価格（円ベース）の前年同期比を計算すると、昨年 10～12 月期の▲9.5%から 1～3 月期には▲42.2%まで急速にマイナス幅を広げた。

一方、数量について品目別に見ると、原油（▲9.0%→▲11.5%）、電子計算機類（コンピュータ、▲22.6%→▲29.8%）、自動車（▲2.2%→▲14.0%）、鉄鋼（▲3.6%→▲21.9%）の減少率拡大が目立った。ただし、1～3 月期の減少率拡大については、昨年 1～3 月期の水準が消費税および環境税の引き上げ前の駆け込み需要など⁴によって押し上げられていたことを勘案する必要がある。当社試算の季節調整値によれば、1～3 月期の輸入数量は前期比+1.6%と増加に転じ、国内景気の底入れと概ね整合的な動きになっている。

輸入数量の推移（季節調整値、2010年=100）



（出所）財務省

以上より、輸入は、金額ベースでは原油安によって大幅に落ち込んでいるが、数量ベースでは国内景気の底入れを映じて下げ止まりの兆しが出てきていると指摘できる。

1～3 月期成長率に対する外需寄与度はマイナスか

以上の通り、今回の貿易統計からは、①円安に伴う輸出価格の上昇持続、②輸出数量の持ち直し、③原油安が円安を凌駕する形での輸入価格の落ち込み、④輸入数量の低迷、といった動きが確認された。ただし、輸出数量は 3 月までのところ、増勢が加速するまでには至っていない。一方、輸入数量には底入れに向かう兆しが窺える。

そのため、1～3 月期の貿易収支は大幅改善となったが、数量面の動きのみが反映される 1～3 月期の実質 GDP 成長率（前期比）に対する外需（純輸出）の寄与度については、10～12 月期の+0.2%Pt から低下した見込みであり、マイナスに転じた可能性もある。当社は今月末に、この外需寄与度も含めた 1～3 月期 GDP・1 次速報値の予測を公表する予定である。

貿易収支は緩やかな改善が続き、次第に黒字定着へ

貿易収支の先行きについてであるが、まず輸入は、国内景気の持ち直しに伴い数量面の底入れが明確化していくが、原油安の影響がなお暫く残るため、金額ベースでの低迷が当面続くと見込まれる。一方、輸出

⁴ その他、電子計算機類については、WindowsXP のサポート終了（昨年 4 月）前の駆け込み需要も生じていた。

は、中国向けや産油国向けの伸び悩みが懸念されるが、基本的には、海外需要の回復（米国堅調、ASEAN 復調、EU 底入れ）に加え、円安に伴う価格競争力改善および円建て価格の嵩上げ、海外生産シフトの影響一巡により、回復傾向が続く見通しである。このため、貿易収支は、目先は再び赤字に転じる月もあるが、緩やかな改善傾向が続き、次第に黒字の状態が定着していくと予想される。